

第 23 回歴史文化をめぐる地域連携協議会

災害の記憶を継承する―震災資料をどう活用していくか―

阪神・淡路大震災から、まもなく 30 年を迎えようとしています。

震災が発生して間もない時期から、この震災の記憶を後世に残すため、行政文書をはじめとして、被災地の写真や避難所関係の記録、被災者の経験談など、あらゆる震災資料が官民有志によって収集・保存されてきました。また、阪神間の歴史学研究者が中心となって、被災した歴史資料の救出活動も行われています。こうした活動が契機となって、2003 年 1 月に地域連携センターは設立されました。以来私たちは、「あの日」を経験した大学の一員として、被災地となった諸地域や学内外の関連機関と連携しながら、被災資料・震災資料を保全・保存し、活用に関する様々な活動を展開してきました。

阪神・淡路大震災は、それまでの人々の日常を破壊する甚大な被害をもたらしました。この震災をはじめとして、東日本大震災や、能登半島地震、近年頻発する記録的豪雨による水害などは、そのインパクトゆえに災害の部分だけが切り取られて語られがちです。ですが、災害を分析しようとしたとき、また、復興を考えていく際には、災害だけでなく、その地域がたどってきた歴史も考慮する必要があります。災害の記憶をも含みこんで地域の歴史を考えること。それは日常を破壊した災害と向き合い、後世に伝えるために必要な営みであり、また、再び起こるかもしれない次の災害への備えへとつながります。

この 30 年の間に世代交代が進み、阪神・淡路大震災を教科書上の出来事でしか知らない世代も増えてきました。行政や学校教育の現場においても、震災を経験しそれを伝えてきた世代が退職の時期を迎えており、当事者が直接震災の経験を伝えることが難しくなっています。今後、震災の記憶を伝えていくために、震災資料が重要な役割を果たしていくことになります。震災を知らない世代が、さらにその先へと震災の記憶を伝えていけるように、資料を整備し、デジタルも含めた公開のあり方を検討していく必要があります。また、近年の災害では、当時の様子を映した映像資料が多く残されており、それらの活用・公開についても、議論が進められています。

こうした経緯を踏まえ、阪神・淡路大震災の発生から 30 年の節目となる今回の協議会では、「災害の記憶を継承する」をテーマとしました。地域の歴史に東日本大震災複合災害を位置づけながら展示する事例として、「とみおかアーカイブ・ミュージアム」(福島県富岡町)の取り組みを報告いただきます。また、神戸大学からは、これまで取り組んできた震災資料の収集・保存・活用についての総括、そして近年の取り組みとして、震災を経験していない世代とともに実施した震災資料活用の実践例について報告します。また、これらの報告を通して、災害の記憶を継承していくために、現状と課題を共有し、今後の活動に繋げていきたいと考えております。多数のご参加をお待ちしております。

日時：2024年12月22日（日）13:00～17:00

会場：神戸大学瀧川記念学術交流会館

主催／神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター

共催／兵庫県教育委員会(予定)、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト
「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、科学研究費特別推進
研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文
化の創成」（研究代表者：奥村弘）研究グループ

プログラム

13:00-13:05 事務連絡

13:05-13:10 開会挨拶 奥村 弘（神戸大学理事・副学長）

13:10-13:15 主催者挨拶 白鳥 義彦（神戸大学大学院人文学研究科長）

13:15-13:30 趣旨説明 井上 舞（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

13:30-14:00 報告① 佐々木 和子（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）
「震災資料の30年」

14:00-14:40 報告② 吉川 圭太（神戸大学大学院人文学研究科講師）
「学生による震災資料の活用実践」

コメント 和田 帆香（神戸大学大学院人文学研究科修了）

14:40-15:10 休憩・交流会

15:10-16:00 報告③ 門馬 健（とみおかアーカイブ・ミュージアム・富岡町教育委員会生
涯学習課業務係長）
「地域資料のなかの震災遺産」

16:00-16:10 休憩

16:10-16:50 総合討論（司会：奥村弘）

16:50-17:00 閉会挨拶 市沢哲（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター長）
（総合司会：出水清之助（神戸大学大学院人文学研究科助手）